

校内研修

1 研究主題「授業の探究」～価値あるものを自分事として学ぶ授業の創造～（9年次）

私たちの校内研修の根幹には、日常の授業をよりよくしていきたいという願いがある。授業研究で終わるのではなく、そこから学んだものを自らの授業に生かし、子どもたちに返している。全ては目の前の子どもたちのために、私たちは、これからも日常の授業をよりよくしていくという願いの実現に向け、自主性と同僚性を発揮して校内研修に取り組んでいきたいと考えている。

私たちは、子どもが、新しい時代に必要となる資質・能力を「価値あるもの」としてきた。新学習指導要領では、「何を知っているか」（コンテンツ、知識・内容）から「何ができるか」（コンピテンシー、資質・能力）、より詳しく言えば「どのような問題解決を現に成し遂げるか」へと転換している。また「自分事として学ぶ」とは、子どもが授業の中で身に付けた見方・考え方を他の授業やそれ以外の場面で働かせたとき、その見方・考え方のよさを実感する姿としている。この副主題は本年度で9年次を迎えるが、私たちが目指すべき授業がこの言葉に詰まっているととも現行の学習指導要領の考え方に通じる普遍的なものであると言える。

これまで私たちは子どもの学びの筋を想像して教材研究を行い、学びの筋に添って丁寧に可視化・共有化・焦点化することを大切にしてきた。我々はどうしても教師の筋に引っ張られがちになってしまう。インフォーマルな知識には偏りがあつたりするのもその大きな理由の一つであろう。しかしその偏りこそが重要であり、その偏りがあるからこそ、子どもは友達の考えを聞きたいと感じ、考えたいという瞬間を生み出すのではないかと考えられる。だからこそ我々は子どもを信じ、子どもと共に授業を作り上げていくのである。その積み重ねにより、子どもの対話は繰り返され、子どもの学びに向かう力が育ってきたと言える。学習の主体者である子どもの側に立ってじっくりと子どもの学びの筋を考えていくとともに、教師が教科の本質を学び、素材の魅力をつかめるまで教材研究をする。授業では子どもの事実を捉え、授業後にはリフレクションをして指導と評価の一体化を図ることで子どもの姿から知見を得て次の授業へつなげていく。私たちはそのような授業の探究を日々繰り返している。

2 研究課題「学びの深まり」子どもの対話から学びを深める教師の出

（可視化、共有化、焦点化）

本校の授業を語る際に対話は欠かせないものである。どの教室においても子ども同士の対話する姿が見られ、子ども同士の対話の質の向上も見られる。しかし、ただ対話をしていけば勝手に学びが深まっていくものではない。

そこで昨年度から本校の課題としているのがその対話からどう学びを深めることができるかである。教師の出を研究してきたが、リフレクションの中で、教師の出の視点となる「可視化」「共有化」「焦点化」の話題が少なかったのも事実である。子どもの事実を捉え、語り合うことがまず重要であるが、今年度はそこから学びの深めどころを生み出し、感じ取り、そこで振る舞う教師の出を探究し、どのような教師の出が子どもの学びを深めていくことができるのかに重点を置きたい。

3 研究方法

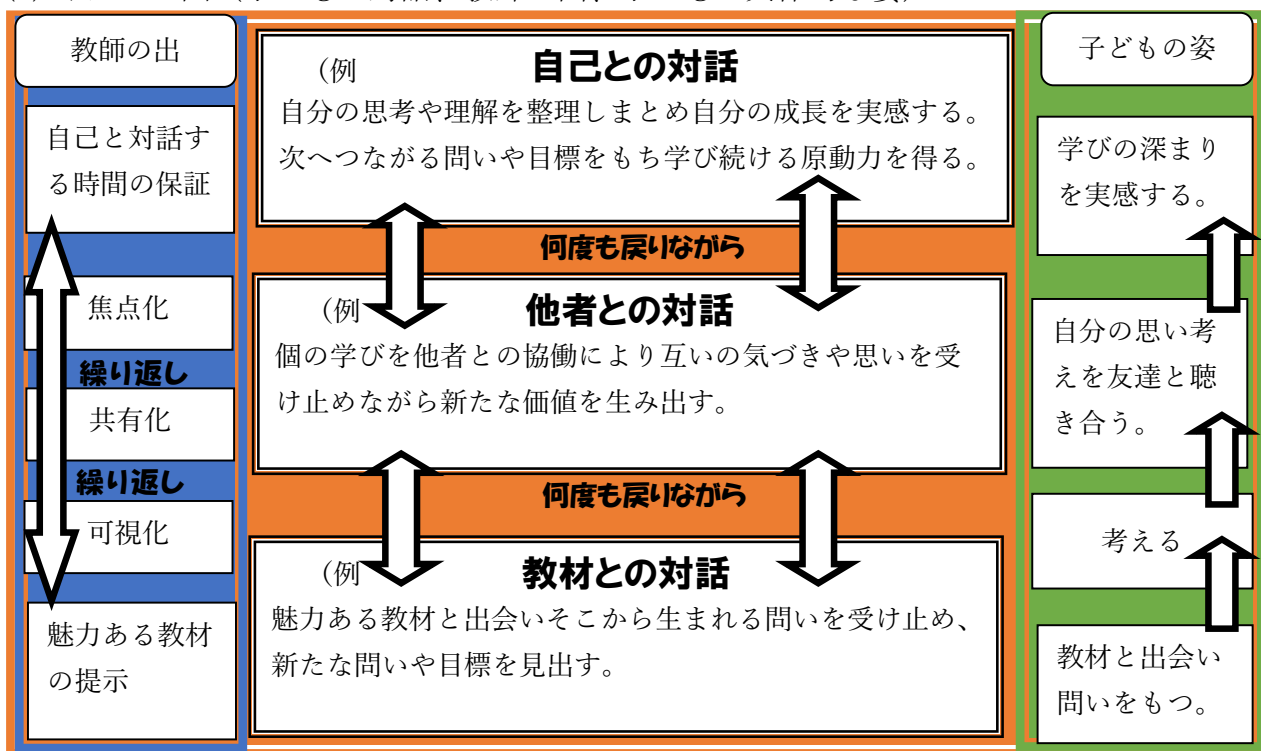
(1) 子どもへのまなざしの省察（「みえる」ということ）

私たちは、子どもの発言の背景まで捉えようと努めなければならない。同じ「なぜ」という疑問でもどういう経緯で生まれたのかは違うのかもしれない。私たちの「まなざし」をふり返っていくことで、学びの深めどころ（教育的瞬間）を感じとることにつながるのではないかと考えられる。

(2) 教科の本質に迫る

我々の課題は教科の専門性が弱いということだ。しかしその専門性なくして、深い学びは達成できないことが昨年度までの研修で学ぶことができた。分からないから考えないのではなく、正解のない中で授業者なりの「見方・考え方」をもった上で授業に臨みたい。

(3) イメージ図（子どもの対話、教師の出、子どもの具体的な姿）



(4) 授業研究を具体する

ア 授業リフレクション

自分の授業について、自らの気づきを通して学ぶことが重要である。自分がとらわれていたものに気づき、目から鱗がとれた瞬間、それまでとは違ったものとして見えてくるようになるようになる。

イ 参加観察

授業の中で抽出児と同じ立場に立ち、子どもと同じ世界を共有し、子どもの目から授業がどう見えているかを観察する。

ウ 協議での多面的な「見え」の交流

参加観察者・授業者・参加者がそれぞれの立場での見え方を付き合わせて協議することで子どもの見方や授業の在り方の問題点を明らかにする。その過程で観が磨かれていく。

エ 写真による参加観察

ファインダーを通して子どもを観察する。子どもの表情を撮り続け、自分なりに意味づけをすることでそれまでもっていた子どもへのまなざしを省察していく。

(5) 授業を再デザインする

授業を進めていく中で、単元の導入時には見えなかった子どもの実態が明らかになれば、単元の流れや目標、次時の仕掛けを変えていく。

(6) 研究や授業への評価を得るために講師を招へいする

新たな教育の動向を知り、確かな見通しを持って授業づくりを進める機会ととらえている。また、実践的視点から、より具体的に内容研究の在り方や指導法を学ぶために、講師を招へいし研修を深めていく。